

35

本居宣長『送藤文輿還肥序』における 『黄帝内経』関連用語の分析

吉川 澄美

北京中医薬大学日本校

本居宣長（1730～1801）は国学者として有名だが、終生町医者を買った人でもあった。『送藤文輿還肥序』は23歳の宝暦2年（1752）から28歳までの京都遊学中に執筆した漢詩文の集成『詩文稿』に収められている（本居宣長全集第18巻）。友人宛ての手紙の体裁で、宣長唯一の「医論」とされる。高橋正夫氏は、「経験の医学」（日本医史学雑誌25巻4号）において、独自の解釈を施し、「宣長独得の経験的医学が割り出された深い知見がこめられている」「本居医哲学とも言うべきものの堂々たる展開」と賞讃して、宣長の医学と国文学を「車輪の両輪」の関係に喩えている。その洞察力には感服するが、氏自身の経験的直感に多く委ねられており、残念ながら具体的な根拠はあまり示されていない。この書簡が書かれたのは松阪へ帰郷して開業する以前の京都遊学中であり、若さゆえの大胆な「医論」と読むことは可能であるが、「宣長の独自性」「宣長自身の経験」を強調しすぎるのはやや早急であろう。この書簡は重要視されながらも、同時代の他の医学文書との比較を通じたテキスト分析や医古典引用の有無について未だ充分され尽くしたとは言い難い。例えば書簡中の以下の文も含めて検討を加えるに値しよう。

「夫れ病は軽劑薄薬のよく治する所にあらざるなり。ただ熙然たる一氣のみ独り病に抗してこれを制す。その気たるや神にして測るべからず〔神而不可測〕。もとよりこれを天に稟けてこれを身に充つるものなり。後世これを元氣と謂う。」（原文は漢文、傍点は筆者による）「一氣」と「真氣」の違いはあるものの『刺節真邪篇』の「真氣者所受於天與穀氣并而充身也」を想起させる。この部分の『内経抜書』（内閣文庫）の注釈をみると、「黄帝問いたまは何か人身真氣元氣ぞと云うなり。岐伯の答に人身の真氣元氣は人身そなわる以前の一滴の精中含む所の陽氣にして、先天の元氣にして今日水穀の精氣の養いに因りてあわせて此の身にみちそなわはるものを真氣元氣とは云う事なり」とされ、真氣と元氣とを同等として扱っている。詳細な引用は略すが、『続医学至要鈔』などにおいても「一滴の精中含む所の陽氣」を「一氣」「一元氣」として、真氣・一氣・元氣を注釈上で串刺にし、さらに「真氣」と読みが通じる「神（心）氣」についても論を展開する。

このようにながめると、書簡は「宣長独自の説」というよりも、師の堀元厚を辿って味岡三伯へ通じる流派の言葉遣いを忠実に反映している可能性が高からう。無論、素問靈樞を重んじ、且つ「真氣・一氣・元氣」を重視したのは味岡流だけではないかもしれないが、加えて着目すべきは「神而不可測」という表現である。後に宣長は、「神明不測」「神妙不測」などを使って自論を説いてゆく。宣長研究の分野では「不可知論」として荻生徂徠の影響が強調されるが、医学との関係は論じられていない。しかし、味岡やその弟子達の書き残した文書には「一氣」や「真氣」「神氣」について「靈妙にして衆理を備ふる」や「神妙不測」「靈妙不測」「不可測」という表現が伴われる事が見出せる。例えば「清淨なる神氣一上焦に住みて靈妙不測なる者にして」とあり、これは堀元厚の師の小川朔庵口述記『三蔵弁解』にある。従って「神而不可測」という表現についても、宣長独自の思想や医哲学の表出というよりも、流派の影響を素直に継承した言葉遣いではなかろうか。本書簡は何より医学関係の文書であり、そこでの「神而不可測」は徂徠の言葉を借りたというよりも、あるいは少なくともそのみならず、味岡系統の用語遣いの影響を無視することはできないと考える。

このように宣長の文章に見出せる『黄帝内経』に典拠する表現を検討すると、味岡流を汲んだ解釈や言い回しが介在している事が発見される。これによっても、宣長における味岡三伯に連なる医学の影響は看過できないであろう。